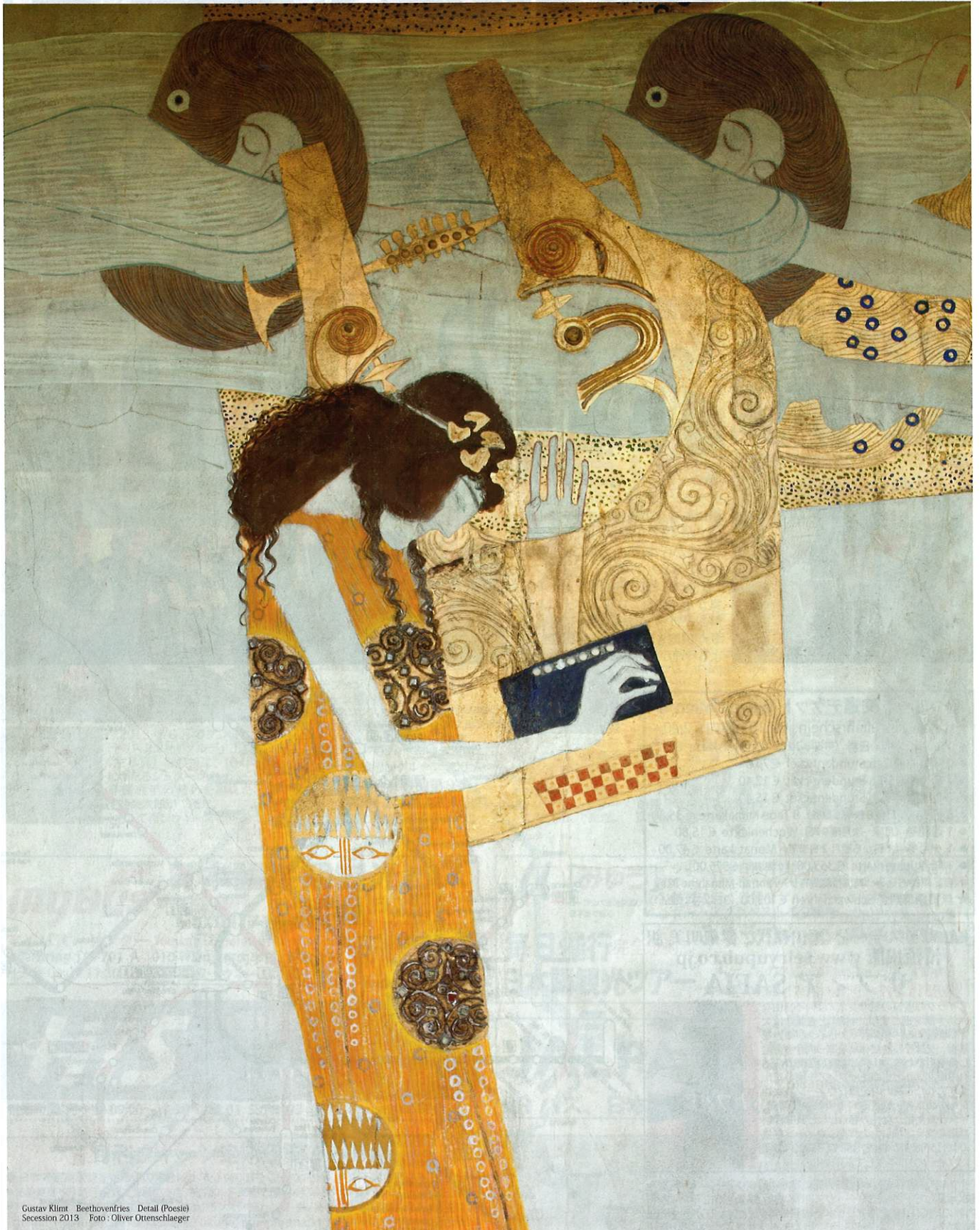


月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊 26 年目
創刊 1989 年 Nr. 297

GEKKAN-WIEN 2014年3月号





杉本純の原子力の話II ウィーンと京都30



ハルビン工程大学の招待により昨年八月にハルビン、十一月には北京で開催された国際会議で筆者が講演した縁により、一月三〜八日まで同大学で開催された雪像コンクールと原子力シンポジウムに本学の学生四名、チームの招待を受けた。募集した所、修士二年の学生二名、修士一年及び四回生各一名の応募があり、ハルビンに派遣した。雪像コンクールには、地元中国から四五チーム、タイ四チーム、ロシア三チームなど十一カ国から



六チームの参加があった。我が国からは京大と明星大学の二チームが参加した。原子力シンポジウムには、四大学（ハルビン工大、京大、デンマーク工科大、韓国科学技術院）が参加し、十一チーム（京大は二チーム）の発表と討論が行われた。外国チームには現地大学のボランティアが二名付いて何かと世話をしてくれる。

雪像コンクールでは、三×三×三メートルの雪ブロックを丸三日間かけて削って像を作る。マイナス二十度以下の寒さとPM_{2.5}が計測不能など大気汚染にも悩まされる厳しい状況下、富士山を何とか作り上げた。シンポジウムでの研究発表と討論に参加し、パーティーや宿泊した国際寮でも交流の機会を最大限活用するなど存在感を示した。そのためか、



来年も招待したいと言われたのは嬉しかった。現地では前夜祭からイベントが連続するので、雪像製作は設計で完璧を期すことが大事、基本的な道具は貸与されるが、細部を作る道具を持参すべきなどの教訓を得た。ハルビンは皆初めてで、珍しい料理やボランティアの案内で市内観光も楽しむなど、新しい友人を得るとともに、貴重な体験ができた。学内報告会では四人とも笑顔であった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の刺繍について述べてみたい。ウィーンの刺繍と言えば、フランス語で「小さな点」を意味するプチボワンが有名である。目の細かい絹キャンバス地に多彩な刺繍糸を用いて、細かなステッチを刻んでいく刺繍技法である。最も古い技法の一つで、歴史は古代エジプトにまでさかのぼる。マリア・テレジアがプチボワンを特に愛したため、十八世紀のウィーンで一般庶民にも広まった。フランス王妃となったその娘マリー・アントワネットもアークセサリーやドレス、ベルサイユ宮殿の調度品にプチボワンをあしらったと

言われている。プチボワンは、気品のある優美さ、色彩の美しさ、優れた技巧など多くの魅力を持つ芸術的刺繍である。

一方、京都の刺繍と言えば京繡（ぬい）が有名である。我が国の刺繍の歴史は、飛鳥時代からと推定され、この時代は仏画を刺繍で表現した掛け物が特徴的である。平安遷都に伴い、繡技の職人をかかえる縫部司が京都に置かれ、衣服の装飾に用いられたのが京繡の起りである。以降、京繡は十二単（平安）、武将の胸服（鎌倉）能衣装（室町）と用いられ安土・桃山時代には小袖に多用されさらに発展した。明治時代以降は、よく、壁掛けなどが現われ、新需要が開拓された。今では、和装品から祭礼品、額に至るまで幅広い製品がある。歴史と伝統に基づく両市の刺繡は、構図、繡糸の配色、繡法が一体となった独自の表現により、情趣あふれた作品を産んでいる。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、プチボワンの有名な店でウィンドウショッピングをたまにはしたが、お土産用に購入したのは比較的安い小物だけだった。京繡に至っては今でもウィンドウショッピングだけでは、それでも両市の有名な刺繡に接することができた幸運に感謝しつつ、編集部撮影をお願いしたプチボワンの写真を掲載させていたたく。



■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■